

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	プラトン『饗宴』：「こころ」について
Author(s)	岡部， 勉
Citation	文学部論叢， 14(哲学篇)： 51-67
Issue date	1985-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/9933
Right	

プラトン『饗宴』—「こころ」について

岡 部 勉

欲望について語ることは、何らかの私自身或は「こころ」について語ることになるのか？ 人は、欲望するのは私であり、また、感覚するのも私だ、と言う。では、同じこの「私」が感覚し、欲望するのか？ そして、感覚でも欲望でも、「主観性」ということで問題になるのは、同じこの「私」だ、と言うのか？ そうは思われない。

欲望と感覚、或は「痛い」「赤い」「美しい」「快い」、これらを通じて同一の仕方では「主観性」を語ることが出来るとしてはならない。「主観性」の問題は、事柄に応じて、多様に論じ分けられるのでなければならない。

ところで、プラトンは『ピレボス』34d10-35d7 で、欲望 (*ἐπιθυμία*) について語ることは「こころ (*ψυχή*)」について語ることであると言っているように見える。しかし、注意しなければならない。それに続けて、このように「こころ」について語ることは動物の生について語ることでしかない、人間の生について語ることではない、と言っているからである (35d8-e6, cf. 35c9-10, d1-3; 36b8-9)。どのように語ることがそうなのか？ —「こころ」を *paschein* するものとして (*pathos* を「こころ」に生じる「こころ」の *pathos* として) 語ることが、である。

人は痛みとか渇きとか悲しみについて、必ず *pathos*—*paschein* するものとしての私」という図式の下で考える。それどころか (本来 *pathos* としてはならない)「赤い」とか「美しい」とか「快い」についてもこの図式の下で考えて、それで「主観性」の問題は終わり、といった具合なのだ。それ故、まさにこの図式が、「主観性」についての探究を決定的に不可能に

しているとも言えるのである。

プラトンは『国家』で pathos の何であるかを明確にしていた*¹。例えば渇きは、その都度私に（否応なく）生じて来て、生じて来たその限りで私のものとなる。そして私を何らか必然的に或る行為（飲むこと）へと導く、そういうものである。しかし、通常、私はそれに従わないことが出来る——それ故、それに従うことは私のすることであり、私の行為である。

これに対して人は渇きを、感覚であり、欲望である（そしてそれ自体も苦痛であるが、それを予想することも苦痛である）と言う*²。では、こういうことなのか？（プラトンは『ピレボス』33c 以下でそう言っているのだ。）

感覚するのは私であり、私の「ところ」である。何故なら、現にのどが渇いているのにそれを忘れて感覚しないことがあるが、その忘れるというのは「ところ」の問題であり、従って忘れないで感覚するというのも「ところ」の問題なのであるから（33d2-34a9）。次に、予想したり期待したりするということ、これは言う迄もなく私のすることであり、私の「ところ」の問題である。従って、予想することが苦痛であるとすれば、それもまた「ところ」の問題であり、そして「ところ」だけの問題である（32b9-c5, 34a10-c3）。ところで、(1)渇きは欲望であり、欠如である（34d10-e14）。(2)欲望の対象は、現在 paschein しているものとは逆のものである。現在 paschein しているのは欠如であり、欲望するのは充足なのであるから（35a1-5）。(3)しかし、生まれてはじめてのどが渇いた人の場合には、その欲望の対象が前もってつかまえられているはずはない。何故なら、それは現在 paschein しているものではないし、過去にその記憶もないのであるから。記憶によってそれはつかまえられているのでなければならない。そして記憶は「ところ」の問題である（35a6-c2）*³。(4)従って、人間を含めて動物を、現在 paschein しているのとは逆のもの、欲望の対象、へと導くのは記憶なのであるから、そして記憶しているのは「ところ」なのであるから、そのもののところへと運んで行くのは「ところ」である。それ

故、欲望するのは「ところ」である (35c3-d4)。(5)すると、(渴きは欲望なのであるから) 渴きを paschein するのは身体ではあり得ない (35d5-7)。

人はそういうことを言いたいのか、とプラトンは言うのである。——(5)は、欲望としての渴きを問題にしている。そして欲望が「ところ」の pathos であることを言っている。(5)は(1)と(4)からの帰結である。また、(4)は(3)を、(3)は(2)を前提にしている。ところが(2)は、現在の pathos に対して未だないものへの欲望を置くのだから、paschein することと欲望することとは別のことであると、はっきり言っている。(2)の「paschein している」は、身体が未だない当のものを欠いているというそのことである (cf. 35b9)。つまり、人は渴きを、一方で欠如という身体の pathos として描き、他方で欲望という「ところ」の pathos として描く、ということなのだ。しかもこの場合、身体と「ところ」とは、決定的に分離することになる。(2)はそのことを言っているのである (cf. 41b11-c8)。——人は pathos を、そしてそれに伴って「ところ」を、とりわけ欲望のところで捉え損なう。

これ以上『ピレボス』の議論を追うことはしない*⁴。われわれはここで考えなければならない。「感覚」は本当に「ところ」の問題なのか？——「感覚」は私のものであって、それは私の身体が私のものであるということと同じことなのだ。そして、今私はどこそこが痛いとかのどが渴いているとかこれこれが悲しいといったことは、私にとっては私の身体が私のものであるということと同じことであり（ここには「私が感覚する」という記述が意味を持ち得る場所はどこにもない）。それ以外のところでは、表情や身振りの問題であって、「ところ」の問題ではない。予想や記憶についてはどうか？ それは「ところ」の問題ではないか？——しかしどこから「ところ」の問題ははじまるのか？「私が予想する」や「私が記憶する」という記述は、はじめから意味を持ち得るのか？ それは「私が見る」と同じように、私にとっては意味のない記述ではあるまいか（私にとって見ることは、例えば「この赤」に尽きる）？そして、色や形がもののそれであ

り、私の感覚ではないように（われわれの視覚の問題である）、予想や記憶も出来事のそれであり、単なる私の思惟ではない（われわれの歴史の問題である）*5。では、欲望についてはどうか？ 欲望するのは私であり、私の「ところ」ではないのか？——だが、(1)–(5)のように語ることは人間の生について語ることでない、何故ならそれは「ところ」を *paschein* するものとして語っているからだ、とプラトンは言う。

ところで、プラトンは『饗宴』で、エロスとは美しいものへの欲望であると語っていたのではなかったか？ 確かにそう語っていた*6。そしてディオティマを通して語られたのは、まさに人間の生についてではなかったか？ それはそうではなかった。

1. 『饗宴』212b1–8

ソクラテスはディオティマの話語り終えると、それに付け加えて、人間の *physis*（本性）にとってこの財産、つまり「徳（*ἀρετή*）」を得るためのよき協力者（*τούτου τοῦ κτήματος τῇ ἀνθρωπείᾳ φύσει συνεργὸν ἀμύνω*）としてのエロスを讃えるべきだ、と言っている*7。

人は、ディオティマとソクラテスとを隔てるものは何もない、プラトンは自説を述べるために二重の腹話術という技巧を凝らしたのだ、とする。確かにソクラテスは、この同じ箇所、ディオティマの話に対して *πέπεισμαι δ' ἐγώ* と言っている。だがこのことは、ディオティマ＝ソクラテスであることの証拠とはならない。ディオティマの語り口は、間違いなくソフィストのそれであり（cf. 208c1 *ὥσπερ οἱ τέλει σοφισταί*）、知っている者の知らない者に対するそれなのだ（cf. 206b5–6, 207a5–6, c2–7）。*πέπεισμαι δ' ἐγώ* もそのことを示すものでしかない（従ってこれは、正しくは「私は説得された」と訳すべきである）。更に、ディオティマは人間の *physis* について、またエロスについて、どのように語っていたか？ そしてそのエロスは、本当に *ἀρετῆς συνεργός* と言えるものであったのか？

——ソクラテスはそのようなものとしてのエロスを、つまり、もしエロスがそのようなものであるならば、そのエロスを、讃えようと言っているのだ**。

2. ディオティマ

ディオティマは、その「奥義 (τὰ τέλεα καὶ ἐποπτικά 210a1)」を語る最後のところで (211d1-212a7)、美そのものを知る (γυνῶ αὐτὸ ὃ ἐστὶ καλόν) 生のここに至って、それは、人間にとって生きるに値するものとなる、美そのものを見るのであるからには (θεωμένῳ αὐτὸ τὸ καλόν), と言う。そして、美そのものを見る (αὐτὸ τὸ καλὸν ἰδεῖν εἰλικρινές, καθαρὸν, ἄμεικτον), それを見るべきものによって見るとき (βλέποντος ἐκεῖνο ᾧ δεῖ θεωμένου, cf. ὁρῶντι ᾧ ὁρατὸν τὸ καλόν), そしてそれと共にあるとき (συνόντος αὐτῷ), その者は真の徳を産むことが出来る、何故ならそのときその者は真をつかまえているのだから (ἅτε τοῦ ἀληθοῦς ἐφαπτομένη), と続ける。そして更に、その者こそがそれによって不死なる者となる、と言って結んでいる。

1. では、私の生が生きるに値するものとなるときというのは、私ที่ไม่死なる者となるそのときだと言うのか?*⁹ ディオティマは、死すべきものの physis (自然) は不死となることを追い求める、そしてそのことは産むことによって可能となる、と語っていた (207c9-d3)。この死すべきものの physis の描きは、エロスのそれについての描きと重なり合う (cf. 206e2-207a4, c8-9)。つまりディオティマはエロスを、人間の、というよりはむしろ、人間を含む動物の、physis (自然) そのものとして語っていたのだ**¹⁰。しかしソクラテスは、212b1-8 に於て、そのようには言わなかった。ソクラテスはエロスを、人間の physis にとってよき *συνεργός* と言ったのである。このずれは、見逃してよいものではない。人間の physis をどう考えるか、これが『饗宴』の一つのポイントであることは、アリストパネスの

話から明らかであるからだ。

アリストパネスは人間の *physis* (自然) について語った。しかし現在の人間ではなく、過去の人間のそれについてである (*ἡ πάλαι ἡμῶν φύσις* 189d6, *ἡ ἀρκαία φύσις ἡμῶν* 192e9-10)。現在の人間はその *physis* を半分失った不完全なものである、それ故全体を取り戻すべくエロスはある (cf. 192e10-193a1)、こうアリストパネスは言うのだ。つまり、何故人は恋い求めるのか、何をを得ることを望んでのことか (192c4, d3-5) という問いに対して、われわれの過去の *physis* (自然) がその原因である (cf. 192e9-10)、われわれはそうに生まれついているのだ (cf. 191c8-d3)、と答えるのである。それ故、よいとか美しいということはこのことに一切関わりがない、とアリストパネスは言っているのでもある*11。

これに対してディオティマは、人は何らかよいものでなければ恋い求めない (205e2-3 *ἐὰν μὴ τυγχάνῃ γέ που ἀγαθὸν ὄν*, cf. 205e7-206a1 *οὐδὲν γε ἄλλο ἐστὶν οὐ ἐρωσὶν ἄνθρωποι ἢ τοῦ ἀγαθοῦ*)、と反論する。このことをプラトンは強調してもいる (cf. 212c4-6)。——しかし注意しなければならない。われわれはどれ程よいものであっても、それをよいと思わなければ、それを求めようとはしないのではないか？ デイオティマの話には、この思うということが決定的に欠けているのだ。従って、思ったことの真偽が問題になるということもない（これは、ディオティマにとって何がよいかは、思ったことの真ということとは全く別の仕方決まる、ということである）*12。

2. デイオティマは、エロスの対象は美しいものよいものであると語った (203d4-5, cf. 202d1-3)。そして、美そのものを知る或は見るならば、それによって徳を産むことが出来る。しかも、それによってそのとき真をつかまえているのだから、真の徳を産むことが出来る、と語っていた。——ここで人は問うべきである。「美しい」と「よい」、そして「美しい」と「徳」と「真」とが、どうしてこんなにもやすやすとつながることが出来るのか？ これらのつながりこそが問題であることは、アガトンの話の

構成がそのことをはっきりと告げている。

アガトンの話は二つに分けられる。前半(195a7-196b3)は「美しい」についての話であり、ここで美しいと言われているのは姿形や色であり、それ以外ではない(cf. 195a8, c7, 196a2, 4-5, 7-8)。それに対して後半(196b4-197b3)は「よい」についての話であり、所謂「四つの主要な徳」が語られている(この部分に「美しい」という語は見当たらない)*¹³。そして二つの話の間に、というよりはむしろ「美しい」と「よい」の間に、それらをつなげるものは全く何もない。強いて言えば、かろうじてそれらがつながっているかのようなのであるのは、どちらもエロスが主語であるということと、「よい」についての話の後にとってつけたように言われる、「美しいものを恋い求めることからすべてよいものは生じた(ἐκ τοῦ ἐρᾶν τῶν καλῶν πάντ' ἀγαθὰ γέγονεν 197b7-8)」ということだけによってである(しかしこれによって、「美しい」と「よい」の間にどのようなつながりが出来たというのか)。

ディオティマもまたこの問題を素通りした。このことは、先ず、204e1-3に示されている。ここでディオティマは、実にあっさり、「美しい」を「よい」に置き換えているのだ。人は美しいものが自分のものになることを恋い求める、では、その美しいものが自分のものとなることによって、何がその人のものとなるのか(204d1-9)? ソクラテスはディオティマのこの問いには答えない(d10-11)。まさにここでディオティマは、「美しい」を「よい」に置き換えて、それを、よいものが自分のものとなることによって、何がその人のものとなるのか、という問いに改める(e1-5)。ソクラテスはこの問いに対しては、その人は幸福になると答える(e6-7)。ここで重要なのは、ディオティマが「美しいものへの恋」を直ちに「よいものへの恋」と置き換えて、その間に何の違いもないとする(cf. ὥσπερ 204e1)のに対して*¹⁴、ソクラテスは「美しい」と「よい」を同じには扱っていないというそのことである*¹⁵。

更に、ディオティマが「興義」を語る、その最初の部分(210a4-e2)を

見なければならない。ディオティマはまず、身体の美（姿形の美しさ）は同じ一つの美だ、と語る (b2-3)。次に、それよりも尊い (τιμιώτερον b7) 美である——そうディオティマはわかり切ったことのように言う——「こころ」の美として、第一に事業 (ἐπιτηδεύματα, cf. 211c4-6) の美を、第二にそれより上位にある (210c6) 美として知識 (ἐπιστήμαι) の美を語る（身体の美のことは c5-6 で σμικρόν τι だと言われている）。そしてその後で周知のように、究極 (τέλος 210e4, 211b7) の美として「美そのもの」(cf. 211b1-2, c8-d1, e1) が語り出される。——問題ははっきりしている。この「美の階梯」は何によって決まっているのか？ それは、より美しいということではあり得ない。何故なら、別の種類の美だと言われているのであるから*16。それ故、対象が違うということ、そして美しいと言われるそれらの諸対象が、美以外の何らかの価値基準によって位階付けられているということなのだ。それが何であるかは、よいというそのことであろうとなかろうと、ここでは問題ではない。人はあれこれとそれを推測する。しかしここで問題なのは、むしろ、ディオティマが、恰もそれは既に解決済みであるかのように、それについては何も語っていないということである。

3. アルキピアデス

ところでディオティマは、行為 (praxis) の美については語らなかった。というよりはむしろ、すべての語り手のうちで、行為そのものの美しさよきを問題にした者は、実は一人もいなかったのである。アルキピアデスの語ったソクラテスを除いては。最初の語り手パイドロスは、行為ではなく行為の結果としての働き (ergon) について語っただけである (cf. 178d3-4, 179c3-4, 5)*17。次のパウサニアスは、恋するということも含めて行為というものはそれ自体としては美しいものでも醜いものでもない、それがどのようになされるか、つまり美しく (καλῶς) 正しく (ὀρθῶς) なされる

かどうかによって*18、それは美しいものとも醜いものともなる、と語った (cf. 180e4-181a5, 183d4-6)。そしてディオティマが行為として言及したのは、産むというそのこと (τόκος, τίκτειν) だけであり (206b1-e1)、美しいと言ったのは、それによって産み出された事業 (ἐπιτηδεύματα) や徳 (ἀρεταί) や知識 (ἐπιστήμαι) ではあっても、当の行為そのものでは決してなかったのである。それ故、ディオティマもまた、結果としての ergon (cf. παιδας, ἔκγονα 209c2-e4) を問題としていたに過ぎないのだ (206b2-3 で praxis は直ぐに ergon と言い換えられている)。

これに対して、アルキピアデスの語ったソクラテスは、219a5-b2 で、「よく考えて下さい、何があなたにとっても私にとっても最もよいとお思いなのか (βουλευόντι ὅτι σοὶ τε ἄριστον καὶ ἐμοὶ ἡγῆ)」と要求したアルキピアデスに対して、「お互いにこれからはよく考えて、どんなことについても、二人に最もよいと明らかになったことを為すようにしよう (ἐν γὰρ τῷ ἐπιόντι χρόνῳ βουλευόμενοι πράξομεν ὃ ἂν φαίνηται νῦν περὶ τε τούτων καὶ περὶ τῶν ἄλλων ἄριστον)」と答えている*19。ソクラテスと他の語り手達——とりわけディオティマ——との対比は、既に明白ではないか？ ソクラテスは行為そのもののよさを問題にしている。そして、われわれ自身がよく考えることによって、何を為すのがよいか、それを明らかにしなければならない、と言っているのだ。

アルキピアデスの話のポイントはここにある。このソクラテスとの対話を伝える部分の直前、218b5-7、の言い方は、確かに秘義を語ろうとする者のそれである。しかしその秘義というのは、219d3-7 で言われているような、ソクラテスその人の physis (資質) とか「節制 (σωφροσύνη)」とか「勇気 (ἀνδρεία)」に関わるものでは、決していないのである。そのことは、プラトンがアルキピアデス自身に、明瞭に告げさせている。それは何よりも愛知 (φιλοσοφία) に関わるはずのものなのだ (cf. 217e6-218b5)。そしてそれが語られているのは、この対話の部分以外にはないのである。アルキピアデスは言う、「私にとって私がよい人間になること以上に重大なこ

とはない、そしてそのことの助力者 (συλλήπτωρ) としてソクラテスに優る人はいない」と (218d1-3. ここで人はエロスについて先に ἀρετῆς συνεργός と言われていたことを思い出すべきである)。これに対してソクラテスは言う、「もし私が、君の言うように、君をよりよい人間にする力のようなものを持っているのだとすれば、そのものの美しさは君の変形の美しさとは全く別種のものであって (πάμπολυ διαφέρων). はるかに貴重なものである (cf. οὐκ ὀλίγῳ μου πλεονεκτεῖν)。というよりは、君は美しいものの見かけではなくその真実を (ἀντὶ δόξης ἀλήθειαν καλῶν) 手に入れようとしているのだ。だが、私が本当にそのような者であるかどうかについては、よく調べてみるべきだ」と (218d7-219a2)。

では、ソクラテスは美を、真のそれとそうでないものとの二つに分けたのか？ そうではない。ソクラテスは、ここで、ものが美しいというそのことに真偽がある、と言っているのではない。確かにソクラテスは、美しいものを二つに分けている。そして、一方を他方よりはるかに貴重なものとしている。しかし、ディオティマと違ってソクラテスは、何故に二つを分けるのか、その基準は何か、をはっきりと表明しているのだ。人は多くものを美しいと言って賞賛する (δόξα καλῶν とはこのことを言う)。だが問題なのは、それが、私がよい人間になるというそのことに真実資するものであるかどうか、その意味で私にとって真実よいものであるかどうか、ということである (ἀλήθεια καλῶν とはこのことを言う)。二つに分けているのは、私にとって真実よいかどうか、私がよい人間になるというそのことに真実資するかどうか、というその違いなのだ。そして、何がそのことに真実資するかについては、それは、自分自身にとって最もよいと明らかになったそのことを為すということ (βουλευόμενος πράττειν ὃ φαίνεται ἑαυτῷ ἄριστον) だ、と言っているのである。

ディオティマはソクラテスと正反対のことを言っている。何故ならディオティマは、子供のために死ぬというようなことについて、人間の場合には、考えた上で (そうする方がよいと考えることから) そうするのだ、と

人は思うかも知れない (*οἰοῦτ' ἂν τις ἐκ λογισμοῦ ταῦτα ποιεῖν*)。しかしそうではないのだ。動物の physis (自然) がそうさせるのだ、と言っているからである (207b6-c1, c9-d2, 208c2-e1^{*20})。或る年齢に達すれば (*ἐπειδὴν ἐν τινὶ ἡλικίᾳ γένωνται*)、われわれは、自然に産むことを欲望するものなのだ (*τίκτειν ἐπιθυμεῖ ἡμῶν ἡ φύσις*) ——ディオティマが行為について何か言い得ることがあるとすれば、これがすべてである (cf. 206c1-4)。こうしてディオティマは、人間を語ることに於て、徹底的に *logos* との関わりを排除した^{*21}。

欲望のところで人間を語るとは、要するに、そういうことなのである。

最初にエロスを欲望として語ったのはエリュクシマコスである (cf. 186b6-7)^{*22}。エリュクシマコスは、身体のエロスをそのようなものとして語ったのであるが (エリュクシマコスは万物にエロスがあるとする, cf. 186a6-7)、ディオティマと違って、エロスの対象を直ちによいものとはしなかった。というよりは、エリュクシマコスは「よい」を究極的な価値語としては用いていない (cf. 186c2, 188d5)。エロスそのものに美しいエロスとそうでないエロスの二つがあるとするのであるが (186c7-d1)、それを分けているのは、健康 (*ὑγιής*) かどうかということであり (186b8-c5)、究極的には *κοσμίως* かどうかというそのことだからである (187d4-5, 188a2-3, c3)。エリュクシマコスの話はコスモロジーの系譜に属するものである^{*23}。——ディオティマは *physis* について語った。勿論その話はコスモロジーの系譜に属するものではない。では何なのか? それが何であれ、それは人間についても「ところ」についても、実のところは、全く何も語ってはいない。

ディオティマは血や肉に於て身体を語り、そしてそれと同じように、生じてはまた消える (とされる) 気質 (*τρόποι*) や人柄 (*ἥθη*) や思い (*δόξαι*) や欲望 (*ἐπιθυμίαι*) や快 (*ἡδοναί*) や苦 (*λύπαι*) や恐れ (*φόβοι*) に於て「ところ」を語る (207d6-e5)。ディオティマの言う「ところ」は、結局は、絶えず生成消滅しつつある (とされる) それらの一つ一つに於て語ら

れるものなのであり、それは知識 (*ἐπιστήμη*) に関してさえそうなのだ (207e5-208a3)。これらすべてを同じように、生じてはまた消えるものとして語るということ、そして、それらをそのように語る以外に「ところ」について語る仕方を見出さないということ、このことが問題なのである。ディオティマは、まさに *pathos* に於て、そしてそれを *paschein* するものとして、「ところ」を語ったに過ぎない²⁴。

(結び) 既にディオティマとソクラテスの違いは明白であろう。ソクラテスは外に己れを隠す衣をまとっている、そうアルキビアデスは語った (216d5-6, 221e2-4)。ソクラテスは装う者である (*εἰρωνευόμενος* 216e4)。シレノスとかサテュロスのように、無知を装い、知を隠す者である (215a6-b3, 216d3-4, 6-7, 222a1-6)。——プラトンは、ここでは第三者にソクラテスを語らせている。だが直ちにこれを「三人称によるソクラテスの弁明」としてはならない。第三者から見たソクラテスはそのように装う者である。それ故、人を弄ぶ人間である。と人の目には映る (cf. *ὀβλιστής* 215b7, 221e3-4)。プラトンはそう言っているのだ。しかしソクラテスは、真実、そのように装う者であるのではない。周知のように、『弁明』のソクラテスは、「私は知者 (*σοφός*) ではない、私は善美 (*καλὸν καγαθόν*) のことは何も知らない。そして知らないからその通りに知らないと思っている」と言っていた (21d3-7, cf. 29b2-6)。ソクラテスが不知を表明した地点は、はっきりしている²⁵。他方、ソクラテスが知を表明したのは、不正を為すこと (*τὸ ἀδικεῖν*) と神であれ人であれよりよきものに従わないこと (*ἀπειθεῖν τῷ βελτίονι καὶ θεῷ καὶ ἀνθρώπῳ*) とは悪であり醜であるというそのことについてであった——ソクラテスは、「私はそれが悪であり醜であることを知っている (*ὅτι κακὸν καὶ αἰσχρὸν ἐστὶν οἶδα*)」と、ここでは断言している (29b6-7)。この二つの地点をどう結ぶか、それが問題なのだ。

アルキビアデスは「君達は誰一人ソクラテスを知らない」と語った

(216c7-d1)。この問題を解くことが出来ない以上は、われわれにとってもアルキビアデスにとっても、それはその通りなのだ。

註

- * 1 拙論「プラトン『国家』」を見よ。

また、プラトンの pathos 論批判について、そして「ところ」の問題については、松永「『ところ』或は「人間の生のかたち」」を見よ。

- * 2 Hackforth, *Plato's Philebus* や Gosling, *Plato Philebus* はその典型である。

- * 3 「記憶によってでなければならない」というのは、ここでは、「現在の pathos としての感覚」か「その保全としての記憶」かという二者択一が議論の前提になっているからである（「感覚」と「記憶」については 33c8-34c3 を見よ）。

また、この箇所を、このようにに読むことについては、Lee, '*Philebus*, 35a6-10' を見よ。

- * 4 しかし少くとも、この後 36c からはじまる「快苦の真偽」についての議論は、「ところ」に関して人がしているこのような見方を前提にしている（36c3-4 を見よ）ということだけは確かである。

だが、このことから「快苦の真偽」についての議論がどう読み解かれることになるかは、当面の問題とは関わりがない。

- * 5 これらについては、知ることとの関わりに於て、別に論じなければならない。——「私が知る」（これは記述なのか？）は私にとって無意味であるどころか、ここから或はここでのみ、私にとって私自身が、つまり私の「ところ」が、問題となるのではないか？

- * 6 202d1-3, 205d1-3, 206e8-207a2. また 200a2-201a1 (Hyland; 'Eros, Epithymia, and Philia in Plato' は、この箇所で *ἔρως* と *ἐπιθυμία* とは区別されていると主張するが、テキスト上にその根拠はない) を見よ。そして、201d6-7 *ἐκ τῶν ὁμολογημένων ἐμοὶ καὶ Ἀγάθωνι* から明らかなように、エロス＝欲望であることはソクラテスの語るディオティマの話の前提になっている。

- * 7 *κτῆματος* i.e. *αὐτοῦ τοῦ καλοῦ* (Bury), *τούτου τοῦ κτῆματος* sc. *becoming θεοφιλῆς and immortal* (Dover) ではない。何故なら、ソクラテスはこれを、180b6-8 で *<ἔρωτα> κυριώτατον εἶναι εἰς ἀρετῆς καὶ εὐδαιμονίας κτῆσιν ἀνθρώποις* と語った、パイドロスに向かって言っているのだからである（212b9 でのエロスの勇敢さへの言及もこのことを示す）。

また b4 の *διό δὴ* は、エロスが *ἀρετῆς συνεργός* だから、ということである。

プラトン『饗宴』——「こころ」について

- * 8 ソクラテスがここでこのような言い方をしているのは、204c8 でソクラテス自身がディオティマの（エロスの *τίς ἐστίν, ποῖός τις, τὰ ἔργα* についての）話が終った直後に発した問い、「エロスがそのようなものであるとすると、そのエロスは人間にとって何の役に立つのか？（*τοιούτου ὧν ὁ ἐρως τίνα χρεῖαν ἔχει τοῖς ἀνθρώποις* ;）」に対応するものである（cf. * 14）。
- * 9 これに対して、『弁明』（38a5-6）の死を前にしたソクラテスが「人間にとって生きるに値しない」と言ったのは、周知のように、「吟味されざる生」についてであり、そしてアルキ比亚デスがソクラテスによって「生きるに値しないと思わされた」のは、「今の私のこの生き様」のことである（cf. 215e7-216a2）。死に行く今ここで、死に行く者としての私の生が、その私にとって生きるに値するものであるかどうかというそのことが問題なのだ。
- * 10 207a5-208b6 で重要なのは、それまで人間のエロスについてなされて来たその同じ話が、そのまま人間を含む動物の *physis* についての話となるというそのことである（ここからの話はそれ以前と異なり、既に「秘儀」めいている、cf. *ποτε* 207a6）。
- * 11 “ἀγαθόν” と “καλόν” はアリストパネスの話の中に全く登場しない。
アリストパネスの語り口が「人間の *physis*」を語る一つの典型的なそれであることについては Dover を見よ。
- * 12 206a1 *τοῦ ἀγαθοῦ* (cf. a4 *τὰ ἀγαθῶν*, a6 *τὸ ἀγαθόν*, a11 *τὸ ἀγαθόν*) は、ディオティマの「奥義」が明す究極の「よいもの」のことである。それが何であれ、ここではそれが、思うことの真とは無関係なところで決められるというそのことが重要である。
- * 13 アガトンの話をこのように分けることについては、その前後（195a7, 197c1-2, e2-3）の *κάλλιστον καὶ ἄριστον* を見よ。
- * 14 ディオティマの話に幾らかでも違いを示唆する箇所はどこにもない。
それどころかディオティマは、その後、エロスの対象を、一方で「よいもの」「よいものが自分のものであること」「それが永遠に自分のものであること」と言い換え（206a3-13）、他方で「美しいもの」「美しいものの中での出産」「不死」と言い換えて、その上で二つは必然的に結びつくとしている（cf. 206e2-207a4）。これは違いを言っているのではない。「よいものが永遠に自分のものであることへの欲望」と「不死への欲望」とは重なり合う、別のことではない、と言っているのだ。そしてそれに続けて、このエロスの描きの上に動物の *physis* のそれを重ね描きした後で、究極目的（としての「幸福」）は、結局は不死というそのことにあると語るのである（207a6-208b6）。
ディオティマの問いは究極目的を問うものであった（cf. *τέλος ἔχειν* 205a3）。207a7 の *αἵτιον*, b7 の *αἰτία* も、（動物の *physis* の）究極目的のことである

(cf. 208b5-6)。——これに対して 204c8 の「エロスがそのようであるとすると、そのエロスは人間にとって何の役に立つのか？」というソクラテスの問い（これ以後のディオティマの話はすべてこの問いに対するディオティマの答えと解すべきである）は、そうではない。このことは、先に見たように、212b3-4 でソクラテスがエロスを *τῇ ἀνθρωπείᾳ φύσει (ἀρετῆς) συνεργός* としたことから明白であろう。

また、よいというそのことを「すべての人はよいものを欲する (*πάντας ἀγαθὰ βούλεσθαι*)」という命題と結びつけて考えているのは、ディオティマの方である。ソクラテスはエロスがすべての人に共通であることを認めただけである (cf. 205a5-8)。

- * 15 ソクラテスは「美しい」と「よい」に対して同じ対応を示していないということのことが問題である。

これに対して人は、201c2 でソクラテスは「よいものは美しいものでもある」と言っているではないか、と反論するかも知れない。しかし、ソクラテスはそこで、「よい」と「美しい」が同じだと言っているのではない（しかも、より正確には、ここで「よいものは美しいものでもある」と言っているのはアガトンの方なのだ）。

- * 16 この間に *καλόν* の比較級は使われていない。また、「美そのもの」も最上級で言われることはない。

これは、考えて見れば当然のことである。色の美しさと形の美しさを比較することさえ、もう既に不可能なのであるから。では、二つは別の種類の美なのか？

ところで、210b1 *ἀδελφόν*, b3 *ἐν τῇ καὶ ταύτῳ*, c5 *συγγενές*、そして *αὐτὸ τὸ καλόν* を巡って、「プラトンのイデア論」を様々に構築しようとする数多くの議論がある（比較的最近の例としては Moravcsik, 'Reason and Eros in the "Ascent"—Passage of the *Symposium*' ; Chen, 'Knowledge of beauty in Plato's *Symposium*' を見よ）。そしてそれに応じて、「別の種類」が何を意味するかについても、殆ど同じ数だけ異なる考え方がある。それについては、ここでは次のことだけを言っておく。——問題は、例えば「この色はあの色よりも美しい」とか「この形はあの形よりも美しい」とは言えるのに対して「この色はあの形よりも美しい」とは言えない（言わないのではない）、といったことをどう解すべきかであって、「イデア」についての「教え」をどう読み取るべきかではない。

- * 17 パイドロスは、an average citizen (Bury) として、勇敢な働き (ergon) を讃えているに過ぎない。

パイドロスの話で目を引くのは、180a5 でアキレウスについて「美しい」と言ったことを除いては、勇敢な ergon についてだけ「美しい」と言っていること

である。この点は、姿形についてだけ「美しい」と言ったアガトンと対照的である。

ところで、アルキピアデスがソクラテスの節制 (*σωφροσύνη*) とか勇氣 (*ἀνδρεία*) について語った視点も、パイドロスのそれと何ら変わるところがない (cf. *ἔργον* 217e5. *ἐπιτηδευμάτων* 221c3)。しかしアルキピアデスは、むしろ、ソクラテスその人の人柄としての「徳」を語ったのである (cf. 219d3-7. 221c3-d6)。この点でパイドロスとは対照的である。

しかしこれらの対照性に関しては、当面は、事実人はそのように言っているという唯それだけのこととしてよい。

- * 18 パウサニアスにとっては *καλῶς = ὀρθῶς = κοσμίως = νομίμως = δικαίως = ἀρετῆς ἕνεκα* である (cf. 181a3-4. 182a5. 184d3-e4. 185b4-5)。パウサニアスの話の中心は *νομίμως* ということにある (cf. 182e2. 183b4. c2. 184a1. b5. 7. c7. d4)。しかしこの場合、*νομίμως* かどうかを決めるのは、結局は (人がそう言っている) 「徳」のため (*ἀρετῆς ἕνεκα*) ということではない。
- * 19 b1 *φαίνονται* の訳は Robin のそれが正しい。しかし *βουλευόμενοι* の訳は間違っている (そしてそのために、*φαίνονται* を正しく訳したことも意味のないものとなっている)。この二つの語はつながっているものであって (それ故「よく考えることから明らかになる」と訳すべきである)、この点にこの一文のすべてがかかっているのである。ソクラテスのこの一文は、アルキピアデスのそれと違って、*βουλεύεσθαι* ということと、行為の主体及び行為そのもの、そしてよいというそのこととの本質的な関わりを、構造的に明示するものなのだ。
- * 20 これら三箇所のつながりは明白であろう。*ἐνταῦθα* 207c9. *κινδυνεύειν ἔτοιμοι εἰσι πάντας ἔτι μᾶλλον ἢ ὑπὲρ τῶν παίδων* 208c7-d1 を見よ。——「徳と名誉のために」ということも、結局は *physis* が「原因」であるということとに還元されてしまう (cf. *τοῦ γὰρ ἀθανάτου ἐρῶσιν* 208e1)。
- * 21 ディオティマに於て *logos* は自然に産み出されるものの一つであるに過ぎない (cf. *ἐνθὺς εὐπορεῖ λόγων* 209b8)。
- * 22 次の語り手アリストパネスも (cf. 191a8. d6. e7-8. 192e10-193a1)、またアガトンも (cf. 196c5. 197a7) そう語った。
- * 23 Bury を見よ (Robin の解釈は的はずれである)。
- * 24 徳を身籠るということに於て「ところ」を語ることは、これと別のことではない (cf. 208e5-209a4)。「身籠る」は明らかに *pathos* 言語であり、*ergon* としての「産む」との対比に於て言われている。
- * 25 加藤「知と不知への関わり」を見よ。

参考文献

- 加藤信朗 「知と不知への関わり——『カルミデス』篇における知の問題」、『理想』601, 1983.
- 松永雄二 「「ところ」或いは「人間の生のかたち」——プラトン『テアイテトス』、『ピレボス』のための一考察」, 九州大学哲学会『哲学論文集』15, 1975.
- 拙論 「プラトン『国家』——或る仮説」, 熊本大学文学会『文学部論叢』10, 1983.
- Bury, R.G., *The Symposium of Plato* (2nd ed.), Cambridge, 1932.
- Chen, L.C.H., 'Knowledge of beauty in Plato's *Symposium*', *Classical Quarterly* 33, 1983, pp.66-74.
- Dover, K., *Plato Symposium*, Cambridge, 1980.
- Gosling, J., *Plato Philebus*, Oxford, 1975.
- Hackforth, R., *Plato's Philebus*, first published under the title *Plato's Examination of Pleasure*, Cambridge, 1945.
- Hyland, D.A., 'Eros, Epithymia, and Philia in Plato', *Phronesis* XIII, 1968, pp.32-46.
- Lee, J.M., 'Philebus. 35a6-10', *Phronesis* XI, 1966, pp.31-34.
- Moravcsik, J.M.E., 'Reason and Eros in the "Ascent"—Passage of the *Symposium*', in J.P. Anton and G.L.Kustus (eds.), *Essays in Ancient Greek Philosophy* (Vol.I), New York, 1971, pp.285-302.
- Robin, L., *Le Banquet*, Paris, 1929.